ひ ら く

～酪農の未来のために～

富士開拓農協だより
号外 第２弾
2026年７月発行

富士開拓農業協同組合

酪農家４名の皆さんに、やりがいと未来につなげたい思いを伺いました

荻平 菊池牧場
菊池 進一郎さん

～経験を積み重ねながら
自分の農業を築いてきた経営者～

趣味
YouTube 鑑賞
魚釣りをはじめようかな･･･

酪農ヘルパーから牧場経営者へ

千葉県柏市出身。麻布大学在学中の北海道実習で酪農ヘルパーという仕事に出会い、現在の道につながっていると話す菊池進一郎さん。大学１年時には当農協管内の酪農実習の一期生として参加。受け入れ側にとっても初の試みで、明るく熱心な姿が印象に残っているといいます。北海道での就職の誘いを受けながらも関東で就職し、ヘルパー組合で約６年間従事。その後ドイツで経験を積み帰国後は農場や勉強会を通じて人脈を広げ、現在の経営へと至りました。「自分の牧場を持つ」という目標のもと、資金と経験を積み上げ、現在の経営基盤を築いています。

自ら考え、自ら選ぶ経営

現在は和牛繁殖を中心に、作業負担の軽減を図り将来を見据えた経営へと移行しています。

特定のやり方に固執せず、YouTube や他の農家の事例を参考にしながら「まず自分で試して判断する」という姿勢を大切にしています。また、家屋のリフォームや小屋の解体などにより設備を整え、作業のしやすさと住みやすさの両立にも取り組んでいます。「勧められたことも鵜呑みにせず、自分で試して合うかを見極める」と話し、柔軟で実践的な経営が特徴です。

一方で、農業の仕組みやルールに対しては課題意識も持ち、特に農協の制度や慣習については「統一性や透明性が必要」と率直に話しています。

夢をかなえ、その先へ

「牧場を持つこと」「生涯乳量 10 万キロ」という目標を達成した今、新たな目標を模索しています。将来的には事業継承も視野に入れ、無理のない形で農業に関わりながら、仕事と生活のバランスも大切にしていきたいと考えています。酪農・畜産については「誰にでも勧められるものではない」としつつも、「本気でやるなら止めない。覚悟を持って挑戦してほしい」と話しています。決して楽ではない現場で、自ら考え選び続けてきた姿はこれからの畜産経営の在り方を示す一つのヒントとなっています。経験を力に道を切り拓き、今もなお自分らしい経営と生き方を模索し続ける姿が印象的でした。

のびのびと過ごす牛たち

富士丘 ㈱朝霧高原城田牧場
城田 亮さん

～受け継いだ想いで歩む、
自分らしい酪農の道～

趣味
仕事!!
バレーボール(検討中)

牛とともに歩み続ける、自分らしい酪農のかたち

日々の生活の中で自然とこの仕事に触れて育ったと話す城田亮さん。現在は経産牛 60 頭、育成牛 40 頭を飼育し、搾乳は朝５時と夕方４時に行っています。 牛舎は子どもの頃から身近な“遊び場”のような存在で牛の世話も特別なものではなく、日常の一部でした。そのため苦手意識はなく、「嫌いではなかった」という素直な気持ちの延長で現在の仕事につながっています。

また、親や祖父母が一生懸命働く姿を間近で見て育ったことも、大きな影響となっています。そうした環境の中で、酪農への理解を深めるために開拓史などを読みながら、自ら学びを深めてきました。

自らの目で守る飼養管理

外部に牛を預託することなく、自家育成にこだわりながら、健康管理と衛生管理を徹底しています。また、ワクチン接種についても補助制度を活用し、疾病予防に積極的に取り組んでいます。何よりも「自分の目で見て管理する」ことを大切にし、一頭一頭の状態を細やかに把握しながら飼養管理を行っています。

餌やりや繁殖管理にも細やかな工夫を行っており、個体の成長段階を見極めながら、体の大きさや状態に応じた飼育管理を心がけています。特に発情のタイミングについては、日々の観察を通じてわずかな変化を見逃さないようにし、適切な時期に種付けが行えるよう管理しています。こうした積み重ねが、繁殖の安定と効率的な飼育につながっています。

また、日々の作業は１日のリズムの中で無駄のない運営を心がけ、安定した生産体制の維持に努めています。さらに、TMR（混合飼料）の導入など、時代に合わせた改善にも取り組み、より良い飼育環境づくりを進めています。

自分らしく続ける酪農

「毎日仕事をしていますが、毎日休みのような感覚です」と話し、自分のペースで働けることや、平日に休みを取れる柔軟な働き方を酪農の魅力として挙げています。

これから酪農を目指す人には、「大変な仕事だからこそ、自分なりに楽しむことが大切」とメッセージを送っています。

今後は、異業種との交流や AI 活用、経営管理手法の導入など、新しい視点に触れる機会を農協主催で設けてもらいながら、より良い酪農の形を模索していきたいと考えています。

家族から自然に受け継いだ酪農を、自らの工夫と責任で守り続け、次代に向けて発展させようとする姿が印象的でした。

家族と実習生で楽しい食事会

荻平　島崎牧場

島崎　信宏さん

～命を育み、
牛と地域を支える～

趣味
音楽鑑賞
三国志鑑賞

命に寄り添う心を受け継ぎ、酪農の道を歩む

祖父母の代から受け継がれ、祖母にレールを敷かれたようにして、自然と酪農の道へと進んできた島崎信宏さん。日々の世話や牧場での出来事を間近に見ながら、牛とともに過ごすことが当たり前だった子ども時代。その経験が、現在の仕事へと自然につながっていったと話しています。

「いずれは牛の仕事をするのだろう」という思いも、幼い頃から自然と心の中にありました。命に触れる日々を重ねる中で、生き物と向き合う仕事への意識が育まれ酪農の道を歩む大きな土台となりました。

また、祖母は祖父の協力を受けながら、地域で多くの赤ちゃんを取り上げた助産師でもありました。命に寄り添う姿勢は、島崎さんの仕事観にも受け継がれています。

牛の健康を守り、地域とともに歩む

現在は約 60 頭を飼養し、搾乳は朝 5 時と夕方 3 時に行い、牛の体調に合わせた管理を行っています。 搾乳前には乳房の洗浄を徹底し、特に夏場は雑菌の繁殖を防ぐため、衛生面に細心の注意を払っています。その結果、大きな病気の発生もなく、現在の飼養方法に手応えを感じています。 また、におい対策についても意識して取り組んでおり、堆肥処理には剪定枝を利用することで、発生する臭気の軽減につなげています。こうした工夫は周辺環境への配慮にもつながっています。

作業の効率化と環境への気配りを両立しながら、地域との共生を意識した経営を行っています。

受け継いだ想いを胸に、牛とともに歩む

「自分がやったことが、そのまま結果として返ってくる」酪農のやりがいについて、そう話しています。日々の積み重ねが成果として表れるからこそ、責任と同時に面白さも感じられる仕事です。酪農業界は、飼料や資材価格の高騰など厳しい環境が続いており、「物価に見合った価格が必要」と感じながらも、消費とのバランスの難しさもあると話しています。あわせて農協には日頃の支援への感謝を持ちつつも、価格の在り方や仕組みの分かりやすさなど、現場に寄り添った対応への期待も寄せています。

これから酪農を目指す人へは、「決して楽な仕事ではないが、本気で取り組む気持ちを持って挑戦してほしい」と率直に話し、外部サービスなども活用しながら、地域とともに農地を守っていくことの大切さを伝えています。また、「命の大切さを実感できる仕事」であることも、大きな魅力の一つです。受け継がれた「命を大切にする心」を胸に、牛と地域に寄り添いながら、自分らしい農業の未来を追求する姿が印象的でした。

人穴富士浅間太鼓は、地域の祭りやイベントなどで力強い演奏を披露し、地域文化の継承と活性化に取り組んでいます。島崎さんも活動に参加し、伝統の継承に貢献しています。

富士丘　なかとみ牧場

中島 貴男さん 由美子さん

～土から始まり、
人へつながる酪農のかたち～

趣味
貴男さん　金魚鑑賞
由美子さん　歌って踊る
古代文字(象形文字)の習字
デザートを食べることが大好き

酪農の原点は土にあり

酪農の道を選んだ背景には、幼い頃からの家庭環境が大きく影響しています。祖父母や両親がともに働く姿を身近に見て育ちました。夫婦で協力しながら仕事に向き合う姿にも共感し、「自分もこういう形で働きたい」と感じたことが、大きなきっかけになったといいます。

一方で、二人の出会いも、「土」に対する思いを共有したことが原点でした。北海道での経験や実習を通じて視野を広げる中で、酪農以外の道を考えた時期もありました。それでも、土や牛、人との関わりを大切に現在の酪農へと進んでいったと、中島貴男さん、由美子さんは話しています。

牛の健康を支える土づくり

現在は約 110 頭を飼養し、搾乳は朝 5 時と夕方 4 時 30 分に行っています。牛の健康状態を日々観察し、小さな変化も見逃さないよう努めています。また、戻し堆肥を活用したベッド管理やバクテリアのコントロールにより、牛が快適に過ごせる環境づくりを行っています。イベルメクチンなどの薬剤も環境への影響を考慮し、必要最小限の使用にとどめています。

特に重視している「土づくり」は、経験や指導者との出会いを通じて、「良い土が良い草をつくり、その草が牛の健康につながる」という考えに至りました。堆肥管理や土の状態の確認を積み重ね、時間をかけて牧草地の改善に取り組んできた結果、かつては条件の厳しかった土地も、現在では安定した環境へと変わってきています。放牧地の管理も含め、日々の一つひとつの作業が牛の健康や経営に直結するため、試行錯誤を重ねながら取り組んでいます。

人とのつながりが酪農の力になる

「自分たちがおいしい牛乳を飲みたいから、自分たちで作る」それが酪農の大きなやりがいだと話しています。実際に味を確かめながら管理することで、牛の状態まで把握でき、仕事の奥深さと面白さを実感しています。

一方で、飼料や資材を輸入に頼る現状や価格の不安定さなど、酪農を取り巻く環境は厳しく、「火のついたタケコプターにぶら下がっているよう(笑)」と表現するほど不安と隣り合わせです。それでも、「ワクワクやドキドキを感じながら進むしかない」と前向きに取り組んでいます。

これから酪農を目指す人へは、「酪農は RPG（ロールプレイングゲーム）のようなもの」と話しています。次々と現れる課題に正解は一つではなく、人に聞き、自分で考え、仲間とつながることが大切だといいます。「コミュニケーションを取ることを楽しめるかどうかが鍵。分からなければ聞きに行く。その行動ができる人が続けていける」と強調し、農協職員とも意見交換を重ねながら、より良い経営や地域づくりを目指しています。自然や牛、人との関わりの中で成り立つ酪農。人とのつながりを大切にしながら挑戦を続ける中島夫妻の姿は、これからの酪農の未来を感じさせるものでありとても印象的でした。

庭を守るかわいい相棒♡